

第二編

歷史

目次

第一章	岩陰遺跡と出土品	三七
一	上黒岩岩陰遺跡	三七
1	出土品	三七
2	縄文時代の上黒岩の生活	三六
二	久万町内の出土品	三六
1	町内の縄文土器	三六
2	久万文化	四〇
第二章	菅生山大宝寺と伊予すだれ	四三
一	菅生山大宝寺	四三
二	古代の道	四三
三	伊予すだれ	四三
第三章	大除城と大野氏	四七
一	大除城主大野氏と久万山	四七
1	鎌倉時代の小田・久万郷	四七
2	南北朝時代の菅野氏	四七
3	大野氏の消長	四九
4	応仁の乱と大野氏	五〇
5	大野氏と大除城	五〇
6	紀伊守利直	五三
7	山城守直昌	五三
8	笹ヶ峠合戦	五三
9	大除落城と大野氏の末路	五三
10	大野氏の幕下	五三
11	直昌公位牌発見の経緯	五三
二	郷村の起こり	五三
第四章	藩政時代の久万	五五
一	概要	五五
1	戦国の久万山	五五
2	村役人	五六
3	年貢	五六
4	御廻領	五七
二	四国遍路と久万山道	五七
三	久万山農民のくらし	五八
四	享保の飢饉と久万山	六〇
五	久万山騒動(寛保元年)	六〇
六	内ノ子騒動(寛延三年)	六三
七	霜夜塚と久万の俳人たち	六三
八	土州池川・名野川農民逃散と大宝寺	六六
1	池川紙すき一揆	六六
2	名野川農民一揆	六七
九	幕末における久万山	六九
第五章	現代における久万町の歩み	七〇
一	久万山騒動(明治四年)	七〇
1	当時の世相	七〇
2	久万山騒動概況	七〇
3	明治維新	七五
二	久万凶荒予備組合	七五
1	備荒貯米の必要	七五
2	久万山民積の由来	七六
3	組合の変遷	七八
4	組合管理	八〇
5	組合の事業	八二
三	土佐街道	八四
1	以前の土佐街道	八四
2	四国新道建設の機来る	八四
3	土佐街道建設に着手	八五
4	新道開さく工事の進行	八七
5	関新平知事	八〇
6	その他の功献者	八二
四	日清・日露と郷土	八二
1	日清戦争	八二
2	日露戦争	八三
五	大正期	八四
1	明治天皇崩御	八四
2	桜島の大爆発	八四
3	第一次世界大戦	八四
4	政党政治	八四
5	シベリア出兵	八五
6	戦争景気と米騒動	八五
7	産業の発達と関東大震災	八五
六	第二次世界大戦と郷土	八六
1	満蒙開拓義勇軍	八六
2	銃後の生活	八七
3	終戦下の郷土	八九
4	戦後のあゆみ	八九
5	合併後のあゆみ	九三
6	大正三年久松伯の登山	一一

第一章 岩陰遺跡と出土品

一 上黒岩岩陰遺跡

四国における洞穴遺跡は、四国四県から、それぞれ発見されている。そして縄文時代のもの、弥生時代のものが圧倒的に多い。もちろん洞穴遺跡は、そのなかに岩陰遺跡も含まれており、石灰岩地帯である上浮穴から、高知県北部にかけて多い。

昭和三六年六月に、美川村上黒岩（ヤナセ）で発見された岩陰遺跡は、その代表的なものといえよう。縄文文化の時代は、一般に、早期・前期・中期・後期・晩期と区別



上黒岩遺跡

されているが、これは愛媛県では初めてと思われる縄文早期の遺跡であり、それまでに郡内でも、久万町を中心に、多くの縄文、弥生時代のものが見られたが、一一年以上も前のものは、これが初めてである。

松山と高知を結ぶ国道三三三号線沿いに流れる仁淀川の支流、久万川の対岸にあって、地形的には、久万川の河床面から、高

さ約一〇呎の水田に接し、高さ三五呎の白い石灰岩が、びょうぶ状に露出して、いわゆる岩陰遺跡を呈している。

これは、当上黒岩の竹口渉が、新しく水田を開いた際、土器や人骨、貝殻の類が出ていたことを知って、地元の美川中央中学校をはじめ、関係機関に報告した。そして、この年の一〇月から翌年一〇月にわたり考古学的発掘調査が行われ、この遺跡が、愛媛県に在住した縄文初期人の形質を知る上で重要であり、また日本文化の系統発生的研究上にも、欠くことのできない重要なものの一つに数えられるようになった。

1 出土品

発掘調査の結果によっても明らかのように、古くはこの附近に多くの動物が生息していたであろうと思われる。



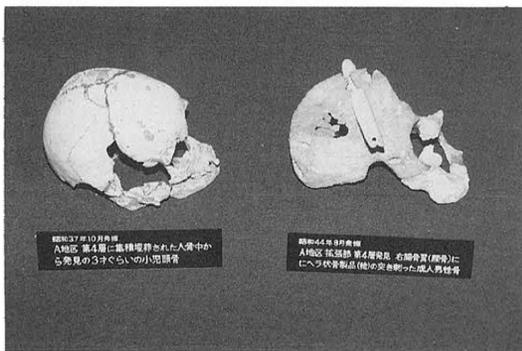
鳥獣魚貝類

シカ、イノシシ、タヌキ、クマ、テン、犬、ムササビ、山鳥、そして淡水産の川ニナ、マシジミの貝殻の他にコイの背骨、カニのはさみなど、多種のものをあげることができる。また海産のハマグリ、カガミ貝、ミルクイ、イトマキボラなどが見られるが、これらについては、今後の研究に待つべきものが多い。

発掘調査は発見の翌三七年に

も七月と一〇月の二回、二次、三次の調査が行われ、第一次の時に発見された人骨五体分と合わせて、一〇数体以上にものぼる人骨が発見されている。成人の男女、幼児などさまざまであり、屈葬に近い完全な一体を除いては、無雑作に埋葬されており、死体置場のような感を呈している。

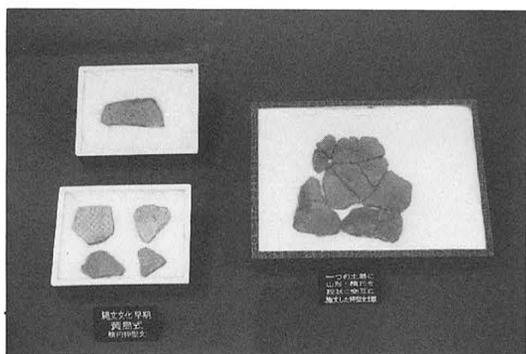
更に、我が国で初めてといわれる線刻神像石が、ここから発掘されている。手のひらに乗るくらいの長まるい緑泥片岩の河原石に線刻して人物を表しているらしい。頭髮の線は長く、その下に上向き放物線状の線が両側の頭髮を取り囲むように描かれており、これは乳房を示す線と考えられる。下半には帯状の線を横に引き、その下に不規則な縦線を引いて、腰みのを表現したかに思われる。発見された七個のうちには、こ



人 骨

の腰みの下に、デルタ地帯を表現したかに思われる逆三角形の線刻も見られ、女性像であろうと考えられる。何を目的として作られたかは、さだかでないが、縄文期に見られる土偶と同じように魔よけか、あるいは、狩猟などのおまもりになされていたのかも知れない。

この特色ある線刻の岩偶のほか、多くの石器、骨角器と混じって、時代の古さを示す土器



土器の種々相

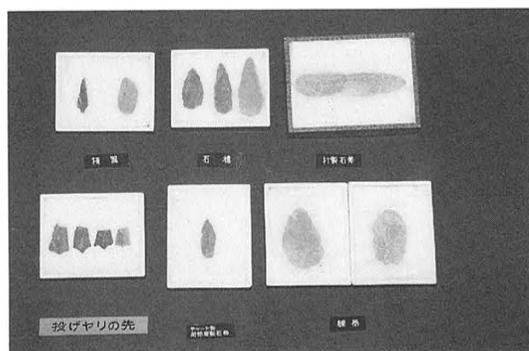
う。

2 縄文時代の上黒岩の生活

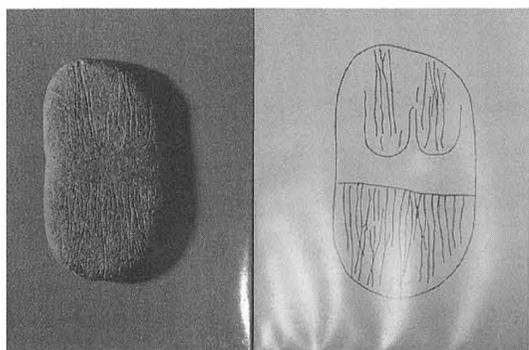
この遺跡は原始人のかなり長期にわたる生活の根拠地となっていたと考えられる。それは出土品の多様性からも、またその層の厚さからも、更に、石器の大部分が矢じりや石やりであることから狩猟生活が主であったことなど、容易に推察できる。

この付近では、シカやイノシシを主として、共同で狩りながらも、家でそれを追い立てた時、偶然にとび出したサル、穴グマ、タヌキ、ムサビなどの小動物を食べないまでも手当たり次第に捕え、その皮を石器を用いてはぎ取り、敷物や衣類として用いたようである。食事は生食だけとは限られていない。焼けた骨もあるし発火器として使用されたで

が数多く発掘され、旧石器時代から新石器時代への橋わたしとしての洞穴、岩陰遺跡であることが明らかとなった。そして、これらの土器に見られる押型文、条痕文、無文、縄文、またその下層に出た細隆起線文土器や尖頭石器類を見ると、この遺跡が縄文早期以前のものとして、上浮穴のひいては我が国未開社会研究の曙光となつて、今後さらに明らかにされることである



石器



線刻神像石

あろう石も残っている。この他にもっと捕りやすいものとして、現在でも生息しているコイをはじめとする川ざかなやカニなどもあったろうが、最も得やすいものは川ニナであったようである。これらの殻は厚い層の中から、かなり多く見つけることができる。シジミなどとともに食べ、他の獲物の少ない時であっても、この久万川の清流のほとりで、案外、豊かな暮らしを送っていたのではなからうかと推察できる。

更に埋葬人骨がつけていたと思われる貝製装身具の貝殻はすべて海産のものであり、貝殻にもハイガイをはじめ、海産の貝類が多く見られる。したがって、土佐湾方面、あるいは豊後水道方面などと、つねに交渉があったと考えられる。

しかし当時でも、現在の米に相当する植物性の食品が必要で、木の实

草の根、例えば、クリ、トチ、クルミ、アケビ、ムクなどが、クズの根や山芋などとともに、常食となっていたらしい。それはヒメクルミの堅い実の炭水化物が一〇数個も灰の中から出ている点からも容易に窺える。当地方の久主下（クズノサガリ）という地名はクズの根を産したことと関係はないものだろうか。

二 久万町内の出土品

上浮穴郡に縄文式土器が初めて発見されたのは、昭和二九年ごろであった。このことによって、伊予の北海道とさえよばれるこの久万山に、遠い原始時代から人類が住みついていたことが実証されたのである。

当時久万町の西端（旧父二峰村）、小田町に接する通称、芋坂で入植者の白岡貞一により、土器の破片が発見された。その後、愛媛大学の西田栄や、当時、上浮穴高校に奉職中の松本重太郎らによって研究が進められ、県下でも上浮穴郡、特に久万町周辺にそれが集中しており、そのころ、最も栄えた地域とさえ、考えられるようになった。

1 町内の縄文土器

ア 芋 坂

父野川より山道を約一五〇〇級登る。ここは比較的広々とした草原であったが、第二次世界大戦の後、数戸の人々によって、開拓されたところであり、郡内で初めて土器が発掘された所として注目される。土器、矢じり、石斧などがある。

イ 笛ヶ滝

久万小学校の西三〇〇竈、国道三三三号線の久万バイパスに接した景勝の地である。

町内で最も多くの出土品を得たところであり、昭和三六年一月、発掘調査が行われた。それによると、今から約三〇〇〇〜二五〇〇年前の、いわゆる縄文後期から晩期の条痕文や無文の土器が主であり、それに混じって、縄文早期の押型文、後期のすり消し文、更には約一五〇〇年前のものと思われるつぼ型の土器の破片なども発見された。石器で最も多いのは矢じりで、なかでも五角形に近いものが多く見られるのは晩期の特色を示すものである。

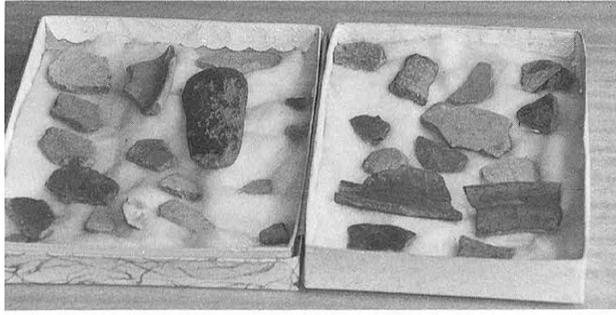
ウ 山 神

東明神の久万川にそそぐ谷あいに入り、明神小学校の裏に面した開墾地であり、二か所にわたって埋蔵されている。

笛ヶ滝より、やや古い様式と思われるすり消し文が発掘されている。開墾当時には、かなりりっぱな出土品もあったが、不要なものとして、こわされたかに言われている。

エ 橋詰付近

父二峰小、中学校を囲むこの周辺には縄文後期のすり消し文が多く出



笛ヶ滝の出土器

土している。このうち、生姜駄馬しやうがだばと早瀬には笛ヶ滝と同じ、きめこまかで美しいすり消し文が見られ、矢じりを伴って出ているが、御所駄馬のは橋状の柄がついていて、芋坂の薄手の磨製石斧いもざかを伴って出ている。

オ その他

これらの埋蔵地のほか、土器の口に、突きさし手法を施した槇野川のもの、やや粗末ではあるが、落合や二か所にまたがる菅生台の無文のもの、また馬酔木谷あせぎたにのものは文様が見られないような細片が多い。同様のものが厚手の磨製石斧を伴って西峰からも出ている。

このほか、千本駄馬、由良野、三坂などには弥生時代のものと思われる文様の土器が見られるが、特に三坂峠のものは、三坂中継所の道路工事中に、ほぼ完全に近いつぼ一個が発掘されている。

以上のように、町内のほとんど全域にわたって、原始文化の跡が見られるが、概して西の父二峰地区に多いように思われる。しかし、東の川瀬地区、特に直瀬でも石斧いしこと思われるものが発掘されており、注目されている。

2 久万文化

久万を中心に栄えた縄文後期から晩期にかけては、まだ米作りは伝わっていない。しかし、道後平野へは、既にそのころ水田耕作を伴う弥生文化（約二三〇〇〜一七〇〇年前）が、西の方から伝えられ始めたと思われる。そこでは、大量にできる米や、それから作られた酒が弥生式土器のかめやつぼに貯えられていたであろう。そして、三坂峠あたりで西の海を望んだ久万の縄文人は、下界にあこがれ、峰づたいに下ってき

ては、道後平野の人々と毛皮、果実、骨角器などの山の幸と交換に、海

の幸やおいしい米の酒を、つぼごと家にもち帰ったことであろう。そして、その米は当時の久万では、技術上、作り得なかったとしても、新しいつぼやかめを、弥生様式を見習って、作り始めたのではなからうか。三坂峠で発見されたつぼも、あるいは途中で、置き忘れたか、捨てられたものかもしれない。

このように縄文時代も終わりのころになると、道後平野との行き来により、縄文土器が、久谷村の中野山や高浜の高山、和気の蓬来寺山などに落とされ、また瀬戸内海のみならず、芋坂の土器の文様が九州のものと、全く一致していたり、大分県の国東半島近くの姫島に産する黒耀石の矢じりと同じものが、芋坂から発掘されたりしている点から、かなり広範囲の交流があったと考えられる。

このように、久万文化ともいうべき、縄文後期、晩期のころの久万地方には、多くの遺跡を残しており、久万山人の築き上げた、この原始文明は、現代に生きる久万町民の文化の源として、大切に保存し、かつ研究を進めていかなければならない。